

## 研究ノート

# 『創世記逐語注解』における アウグスティヌスの「神の形」解釈について

森 泰 男

### 1. 問題の所在

アウグスティヌスは若い時、折角手にとって読んだ旧約聖書の表現につまづい<sup>(1)</sup>た。神がエデンの園を歩いたとか、神が手をさし出したとかといった言葉にはどうしてもついて行けなかった。なぜならば、体は可変的・可死的なものである故に、それを神に帰することはできないと思われたからである。その限り、旧約聖書を攻撃したマニ教徒の方が正しいと彼は考えた。

さて、創世記1章26—27節には、神は「我々の形に、我々に似せて人を創ろう」と語り、そのようにして人間を創った、と記されている。それに対して、マニ教徒は、もし神が体をもった我々人間に似ているというのであれば、神も我々と同じような体をもっているはずだ、しかしそれはありえない、と創世記を全面的に否定した。若い時のアウグスティヌスもマニ教徒の主張に同意して、神が体をもつことを否定せざるをえなかつた<sup>(2)</sup>のである。

しかしアウグスティヌスはやがて、アンブロシウスの説教を通して、創世記が語るのはそのようなおろかなことではないということを知った。我々が神の形に、神に似せて創られているのであって、人間が自分の形に似せて神を創ったのではない。人間が勝手に造り上げた形はまさに偶像に他ならない。そのような偶像を造ること(imaginatio)を、アウグスティヌスは厳しく斥けたのである。後のアウグス

ティヌスによるならば、マ=教徒こそそのようなおろかな像を造り上げていたのである。<sup>(3)</sup>

アンブロシウスの説教を通して知ったことは、神は霊的な実体であるから、人間が神の形に創られたということは人間の体に関わるのではないということである。アウグスティヌスはまず神人同形論を斥けねばならなかったのである。

周知のように、「神の形」(imago Dei) に関しては、古くから色々の議論が展開されてきた。神の形とは何か。形(imago)と類似(similitudo)は区別されるのか。神の形はアダムの墮罪によって失われたのか、それとも弱められはしたが残存しているのか、等々である。

先にふれたように、神の形に関する問題は若い時のアウグスティヌスをつまづかせた。しかし、まさにこの問題をきっかけにして、アウグスティヌスの人間論は深められたのである。この問題をとり上げて考察してみたい。ところで、神の形という点、『三位一体論』が有名であるが、我々はむしろ『創世記逐語注解』に注目したい。ここでは、創世記1章26—27節をめぐる議論が展開しているが、同時に第1巻の光の創造や第8巻以降の人間の墮罪との関連において、人間の問題が深く考察されているからである。

そこでまず第一に、アウグスティヌス以前の教父達の解釈を概観したい。次に、『創世記逐語注解』第1巻の分析を通して光の創造における *conversio* (向き直り) と *formatio* (形成) との関係を明らかにし、それが第3巻においてどのように展開されているかを見たい。第三に、アウグスティヌスの「神の形」解釈をいくつかの角度から考察し、最後に、アウグスティヌスの解釈の特色と意義について述べて、まとめたい。

## 2. 「神の形」の解釈史

ヘブライ語の原典では、「我々の形(ツェレム)において」「我々の類似(デムート)として」人間を創ろう、となっている。フォン・ラートも指摘しているように<sup>(4)</sup>、形と類似は別のものを指すわけではない。むしろ創世記の著者はこの二つの言葉によって一つのことを言おうとしているのである。

ところが、70人訳では *κατὰ εἰκόνα καὶ καθ' ὁμοίωσιν* と訳され、同じ前置詞が

用いられ二つの言葉は「と」で結ばれたのである。それを受けて、ラテン語訳でも ad imaginem et ad similitudinem と訳されたのである。その結果、ギリシア語訳やラテン語訳では、二つの言葉の並列がめだつことになり、エイレナイオスのように両者を区別する解釈が起こったのである。<sup>(5)</sup>

次に、新約聖書においては、イエス・キリストがすぐれて神の形である。それに応じて第二に、イエス・キリストを信じる者も、新しく創られることによって、神の形となることが許されるのである。新約聖書に特徴的なことは、人間に関する限り、「神の形」は「新しく創られること」と密接に結びついていることである。<sup>(6)</sup>

さて、アレクサンドリアのフィロンは『世界の創造について』において、神は人間を創りこれに魂（ψυχή）を与えた、と述べている。<sup>(7)</sup> フィロンは、人間が神の形であるのは魂においてであることを初めてはっきりと言い表した。元来イスラエルでは、体と魂とを二元論的に語ることはしなかったが、フィロンによってギリシア的な心身論が本格的に導入されたのである。

周知のように、創世記には二つの創造物語がある。一つは1章1節から2章4節前半までで、もう一つは2章4節後半から2章の終わりまでである。したがって、人間の創造も2度語られることになる。一つは1章26—27節であり、もう一つは2章7節と21節以下である。両者の間には色々なちがいがあがる。まず第一に、前者では神の言による創造が強調されるのに対して、後者では人を土のちりから創ったとされている。第二に、前者では人は最初から男と女とに創られているのに対して、後者ではまず人（男）が創られ、後から男の助け手として女が創られている。第三に、前者では人間の創造に関してだけ「神の形に」創ったとあるのに対して、後者は人間も他の被造物と同じように土のちりから創られたというのである。第四に、前者では人間は最後に創造の頂点として創られているのに対して、後者ではまず人間が創造されている。これらのくいちがいは、今日では、異なった資料の問題として処理されるが、古代の人々はなんとかして二つのテキストを整合的に理解しようとしたのである。フィロンはこの点に関して、まず最初に創られたのは人間の魂であり、それが後になって体と結びついた、と解釈したのである。<sup>(8)</sup>

フィロンの解釈はアレクサンドリアの教父達によって受け継がれた。たとえば、オリゲネスは「虫けらも神の形に似せて創られたのか」と嘲笑するケルススに反論

して、「神の形においてあるもの」と「神の形であるもの」とは区別しなければならないと主張した。全く神に似ているのは神のみ子以外にはない。それに対して、我々は神の形に創られてはいるが、まだ似てはいない。ケルススはこのことを区別しないから、あのようなおろかな誤解に陥ったのである。我々はすべての点において神に似ているというわけではない。オリゲネスはこのように考えたのである。<sup>(9)</sup>

更に、オリゲネスは、ルフィーヌスの訳によって知られる説教において、み子と我々人間とを区別して、み子が神の形であるのに対して、我々はみ子の形の類似に<sup>(10)</sup> (ad imaginis similitudinem) 創られた、と述べている。「形の類似に」というのはおもしろい考え方である。というのは、「形」と「類似」をひき離さないで、両者を動的にとらえようとしているからである。

更に、カイサリアのバシレイオスもフィロンと同じように、人間が神の形であるのは体においてではなく、理性あるいは精神においてであるという。精神はパウロのいう「内なる人」のことであり、神がご自身に似せて創ったのはこの「内なる人」である魂なのである。したがって、土のちりから創られた体の姿・形は「神の形に」はない。なぜならば、パウロもいうように、外なる人は可變的・可死的であるからである。<sup>(11)</sup>

最後に、アンブロシウスはオリゲネスと同じように、み子が父の形であることを強調している。父と子は一つである。そこにはペルソナの区別はあるが、神性の分裂や働きの一一致はありえない。アンブロシウスは「私と父とは一つである(unum sumus)」というイエスの言葉を引用しつつ、そのことを論じている。<sup>(12)</sup>

次に、アンブロシウスは神の形の問題を取り上げ、人間に関していわれる形(imago) は体のことではない、と述べている。また、墮罪後に陥っているような形からは脱却しようと呼びかけている。確かにアンブロシウスも、「我々であるもの」と「我々のものであるもの」とを区別し、神の形を「我々であるもの」の方に求めている。その限り、アウグスティヌスはアンブロシウスを誤解してはいない。しかし同時に、アンブロシウスは、魂において人は「人間全体」(totus homo)、ギリシア語の *ἄνθρωπος* であり、それが神の形にある、と述べている。すなわち、アンブロシウスは体を排除するのではなく、むしろそれを正しい生き方へと方向づけることをめざしているのである。<sup>(13)</sup>

### 3. 「我々」の複数性と「神」の単数性

アンブロシウスは「創ろう」という神の呼びかけに関して、神は誰に語ったのかということの問題にし、神自身に語りかけたのではないという。それでは、「天使達にか」という問いに対しても「否」と答えている。なぜならば、天使達は僕であって、創り主と一緒に働くことはできないからである。ユダヤ人やアリウス主義者達がどう言おうと、それを認めることはできない、とアンブロシウスは断言している。<sup>(14)</sup>

アウグスティヌスも「我々」において神のペルソナの複数性を見、「神」の単数性に神の唯一性を認めている。したがって、人間は父だけの形でもなければ子だけの形でもない。三一の神の形なのである。<sup>(15)</sup>

次に、人間が神の形にあるのは理性 (ratio)、精神 (mens) あるいは知性 (intelligentia) においてである。創世記において、神は人間に対して、「生きものをおさめよ」と命令しているが、体に関する限り、人間は動物に勝るものではない。アウグスティヌスによるならば、人間が神の形に創られているのは、照明された精神のある可知的形相においてである。ここに、精神が照明されねばならないことがはっきりと述べられている。<sup>(16)</sup>

### 4. 照明と形成

アウグスティヌスは第1巻において光の創造について論じているが、<sup>(17)</sup>それによるならば、創世記1章1節において述べられている「天」とは天使のことである。天使ははじめに創られたものである。しかし、創られたままの地は「形なくととのわなかった」。神はそれをそのままに放置せず、「光あれ」と語ってそれに美しい形相を与えられたのである。天使も照らされねばならない。事実、天使は自ら光の源である神の方へ向き直る時、光に照らされ、形を与えられ、善いものとなったのである。この点に関する限り、天使は他の被造物と区別されねばならない。すなわち、天体や動植物は創られた時既に美しい形を与えられているのに対して、天使は自らの意志によって神の呼びかけに応えねばならない。そして神の呼びかけに応じて神の方を向いた時にはじめて美しい形を与えられたのである。<sup>(18)</sup>

天使は被造物であるから、永遠ではない。永遠なのは神だけである。しかし、天使は神を見続けることによって、時間を超えている。<sup>(19)</sup>そこが人間とちがうところなのである。

さて、人間は確かに神の形に創られてはいるが、神の形を自らの「もの」とすることはできない。アンブロシウスの言葉を借りれば、神の形は「我々のもの」ではないからである。我々は「神の形に」(ad imaginem Dei) すなわち神との関係の中に入れられているのである。アウグスティヌスによると、イエス・キリストは神の形であるが、我々は神の形に(ad)ある。したがって、人間は神の方を向くか背き去るかを自ら決断しなければならない。しかし天使とはちがって、人間は時間において生きる存在である故に、一度神に背いても、回心するならば、光に照らされ神の形へと新しく創られるのである。すなわち、人間には回心と更新の機会が与えられているのである。<sup>(20)</sup>

更に、天使にとって体は必然ではない。しかし人間は、その精神において神の形に創られているにせよ、人間の魂は体と結びつかねばならない。確かに、体との結びつきの故に、人間は感覚に惑わされ、体の欲にひっぱられる。しかしアウグスティヌスは、ポルフェリオスなどのように、一刻も早く体から逃げ出すべきだ、と考えているのではなく、アンブロシウスと同じように、体をおさめることの大切さをよく知っているのである。その限り、魂と体の間には、<sup>(21)</sup>支配するものと服従するものという関係がある。その先後の秩序を逆転させてはならないのである。

要するに、アウグスティヌスは人間の魂において神の形を求めているが、その魂は体と密接な結びつきをもっているのである。そして、神の形はまさに人間の主体的な回心と神への固着において見られねばならない。

## 5. 形と類似

ところで、マークスは形に関するアウグスティヌスの思想には変化があるという。すなわち、初期のアウグスティヌスは伝統的な考えに従って、み子だけが神の形であって、我々人間はただ神の形に(ad imaginem)あるだけである、と考えていたが、パウロを読むことによって、我々人間も神の形であることを認めるようになった、<sup>(22)</sup>というのである。しかし、イエス・キリストと我々との間にははっきりと

した区別がなければならない。そのために、アウグスティヌスは「同等性」(aequalitas) という概念を導入した、とマークスは主張している。ソメールスによれば、その間にはオリゲネスとの対決があるという。すなわち、父と子との関係についてのオリゲネスの思想には、アリウス主義的解釈を認める余地があるが、アウグスティヌスはそれをはっきりと批判した、というのである<sup>(23)</sup>。

イエス・キリストは神の形として神と等しいかたである。み子は父と同質 (consubstantialis) であり、父と共に永遠 (coaeternus) である。天使といえども、神と等しくあることはできない。人間も神の被造物として神と等しくあることはできない。

エイレナイオスは形 (εἰκών) と類似 (ὁμοίωσις) とを区別し、εἰκών は初めから人間に与えられているものであるのに対して、ὁμοίωσις は人間の到達すべき目的である、と主張した。しかし、我々はむしろ両者の密接な結びつきに注目したい。すなわち、形を理性に固有の能力と解するのではなく、むしろ imago を「似像」と訳すこともあるように、これを関係概念として受け取らねばならない。「形とされる」という動きの中で把えることが大切である。その時にこそ、真の意味で「似たもの」とされるからである。

アダムの墮罪以来、人間は神に最も似つかわしくないものとなってしまった。類似ではなく「非類似」(dissimilitudo) をこそそこに見なければならない。ただ神の呼びかけに応えて向きを変える時にだけ、我々は神の形に創りかえられるのである。その時に初めて、イエス・キリストと我々との間に類似が成立するのである。

しかし、神と人間との間には不等性が厳存する。更に、確かにそこには類似が存在するとしても、非類似がなくなってしまうのではない。むしろ、アウグスティヌスによれば、類似すればする程、逆に非類似もまた明らかになるのである。アウグスティヌスは『告白』において、魂の神への上昇とそこからの転落について述べている<sup>(24)</sup>。確かにそこには、プロティノス的な合一と似た表現が用いられてはいるが、しかし両者のちがいは明らかである。というのは、アウグスティヌスにおいては、むしろ非類似の方が浮かび上がってくるからである。

このような非類似は単に人間の身体性によるだけではない。むしろ、人間の精神においてこそ、それは見られねばならない。人間は思い上がりから自由になって、

創造者の方を向き謙虚に神の言に従わねばならない。我々人間は罪のもたらした非類似にとどまることはできない。しかし他方、人間である限り神との同等性を獲得することもできない。我々は不等性において、神に似たものとなることは許されているし、ならねばならない。それこそまさに人間が神の形に創られていることの意味であり内実なのである。

## 6. 結び

以上において、我々は創世記 1 章 26—27 節についてのアウグスティヌスの解釈を取り上げて考察してきた。その解釈は遠くはアレクサンドリアのフィロンにまでさかのぼりうるものであるが、より近くはオリゲネスから流れ出し、カイサリアのパシレイオス、アンブロシウスを經由してアウグスティヌスに受け継がれたものである。しかし彼は同時にオリゲネスと対決し、更にホモウシオス説を斥けるマリウス・ウィクトリヌスとも対決して、父と子の同等性を強く主張せざるをえなかった<sup>(25)</sup>のである。

次に、形と類似を区別したにせよ、アウグスティヌスが両者を密接に結びつけ、形を動的に「形となる」ことにおいて把えようとしていることは見逃しえない点である。

第三に、それにもかかわらず、アウグスティヌスは神と人間との間の不等性を見失うことなく、不等性において類似を把えていた。これはアウグスティヌス自身の体験に基づく告白なのである。

要するに、アウグスティヌスは「神の形」を人間固有の能力とみなしてそれを根拠に神に逆らう自由を主張したりはしていない。「神の形であること」はまさに「神に似たものとされる」という脈絡の中ではじめて正しく把えられるのである。

## 註

- (1) *Conf.*, III, 5, 9.
- (2) *Ibid.*, 7, 12.
- (3) *Ibid.*, VII, 1, 2. なお *imaginatio* (像化作用) の積極的な評価に関しては、今道友信、「像と存在」(沢田允茂他編、『科学と存在論』思索社所収) 参照。
- (4) von Rad, *Genesis* (SCM Press) p. 57f.



- (5) Irenaeus, *Adversus haereses*, V, 6, 1. Cf. R. A. Markus, 《Imago》 and 《similitudo》 in Augustine, in *REA*, 10, p. 126.
- (6) *Eph.* 4, 24, *Col.* 1, 15.
- (7) *De opificio mundi*, 69.
- (8) 拙稿, 「創世記解釈としてのアウグスティヌスの質料論について」(西南学院大学『文理論集』第15巻第2号所収) 48ページ以下参照。
- (9) *Contra Celsum*, IV, 30.
- (10) *In Gen. homilia*, I, 13. Cf. *Oeuvres de St. Augustin*, 48. Note compl. 15 (p. 625).
- (11) *Sur l'origine de l'homme*, I, 6—7 (*Sources Chrétiennes*, 160). Cf. note compl. 15 (p. 624).
- (12) *Hexaemeron*, VI, 7, 41.
- (13) *Ibid.*, 8, 46.
- (14) *Ibid.*, 7, 40.
- (15) *De Gen. ad litt.*, III, 19, 29.
- (16) *Ibid.*, 20, 30. forma quadam intelligibili mentis illuminatae.
- (17) 拙稿, 「アウグスティヌス, 『創世記逐語注解』における光の創造について(一)」(『文理論集』第19巻第2号所収) 参照。
- (18) *De Gen. ad litt.*, I, 3, 7.
- (19) *Ibid.*, 9, 15, *Conf.*, XII, 9, 9.
- (20) *Ibid.*, III, 20, 32. Cf. *Oeuvres de St. Augustin*, 48. Note compl. 16 (p. 633).
- (21) 野町啓, 『初期クリスト教とギリシア哲学』(創文社), 246—248ページ参照。
- (22) Markus, pp. 134ff.
- (23) H. Somers, Image de Dieu. Les sources de l'exégèse augustinienne, dans *REA*, 7, p. 118.
- (24) *Conf.*, VII, 10, 16, IX, 10, 24; cf. VII, 17, 23.
- (25) Markus, p. 128.